

大阪狭山市文化財報告書9

# 大阪狭山市内遺跡群 発掘調査概要報告書 3

1993.3

大阪狭山市教育委員会

## は　し　が　き

大阪狭山市内には、史跡名勝狭山池をはじめとする多くの文化財があります。最近では、中世の城館跡である池尻城跡が発掘され、多くの人々の注目をあびました。ところが、これまで農村地帯であった本市内においても、近年急速に開発がすすめられ、埋蔵文化財に対する緊急調査の必要性が増してきました。大阪狭山市教育委員会では、このような状況に対処するため、平成2年度より国、大阪府の補助金を受け、本格的に個人住宅の建築に先立つ埋蔵文化財の調査を開始いたしました。今年度も狭山藩陣屋跡を中心に調査を実施し多くの成果をあげることができました。

今年度の調査にあたっては、建築主の皆様や、調査地周辺の皆様に多くの協力をたまわりました。厚くお礼を申し上げるとともに、今後とも文化財保護に対する、一層のご支援をよろしくお願い申し上げます。

1993年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 上谷三郎

## 例　　言

1. 本書は大阪狭山市教育委員会が平成4年度国庫、府費補助事業として実施した大阪狭山市内所在の埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。調査は平成4年4月1日から、平成5年3月31日まで行ったが、本書に報告したのは平成5年2月初旬までの調査結果である。それ以後実施した調査の結果については来年度の報告書において報告することにしたい。
2. 調査は大阪狭山市教育委員会社会教育課市川秀之、植田隆司を担当者として実施した。調査に当たっては杉本尉江、桜渕繁太郎、高林正男、鶴岡信之助、廣瀬美智子、高林慶子、中野圭子をはじめとした諸氏の参加、協力を得た。また地形分類図については、豊田兼典先生（大阪府科学教育センター指導主事）の作成されたものを利用させていただいた。記して謝意を表する次第である。
3. 本書の執筆、編集は市川が行ない、植田隆司（大阪狭山市教育委員会社会教育課）がこれを補佐した。

## 目 次

はしがき 大阪狭山市教育委員会教育長 上谷三郎  
例 言

1.はじめ	1
2.狭山藩陣屋跡	4
3.池尻城跡	14
3.まとめ	16

## 挿 図 目 次

第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布	2
第2図 狹山藩陣屋跡・池尻城跡調査区位置図	3
第3図 狹山藩陣屋跡92-1区遺構平面図	5
第4図 狹山藩陣屋跡92-1区、包含層出土遺物実測図	6
第5図 狹山藩陣屋跡92-2区遺構平断面図	7
第6図 狹山藩陣屋跡92-3区遺構平断面図	8
第7図 狹山藩陣屋跡92-4区遺構平面図	10
第8図 狹山藩陣屋跡92-4区出土遺物実測図(1)	12
第9図 狹山藩陣屋跡92-4区出土遺物実測図(2)	13
第10図 狹山藩陣屋跡92-5区平断面図	14
第11図 池尻城跡92-1区平断面図	15

## 1. はじめに

大阪狭山市は、大阪市などのベッドタウンとして昭和40年代以降急速な人口の増加を示した。近年ではその勢いはやや衰えたとはいえ、住宅開発はやはり盛んであり、それにともなう埋蔵文化財の発掘調査の件数にも減少のきざしはない。この傾向は今後も持続すると考えられる。

本報告書においては平成4年2月以降、平成5年2月初旬までに大阪狭山市教育委員会が実施した市内の個人住宅建設などとともに発掘調査の成果を掲載することとする。ただし本市においては狭山ニュータウンなどすでに大規模な造成工事がおこなわれた箇所における住宅の新築、増築に際しては立会調査を実施することとしている。立会調査の結果、遺物、遺構が検出されなかった現場が多数あったがこれらについては報告を省略する。以下、市内遺跡の概要を述べたのち、遺跡ごとに今年度の調査成果を報告することとした。

大阪狭山市内の遺跡分布、地形分類は第1図に示したとおりである。大阪狭山市は泉州北丘陵、羽曳野丘陵にはさまれた地形で、この両丘陵の間には南北にいくつかの谷が走っている。これらの谷筋から旧石器時代、縄文時代の打製石器が幾度か採集されているが、当該の時代については本格的な発掘調査はいまだなされておらず、また土器の出土もない。弥生時代の遺跡としても市の南部において菜莢木遺跡が知られているだけである。古墳時代を迎えて、ようやく本市の遺跡の様相は明確となってくる。市の西半分、狭山池以西の丘陵地には古墳時代に多くの須恵器窯が築かれた。これは当時わが国最大の須恵器生産地であった陶邑窯跡群が須恵器需要の増大とともに東へと広がった結果生じた現象であり、6世紀後半には市内の須恵器生産は最高潮に達し、狭山池より東の小規模な谷や段丘崖の斜面を利用してまで窯がつぎつぎと作られた。近年ではこれら須恵器窯の発掘が毎年のように実施されている。また市内を南北に流れる河川の内でも天野川（西除川）とその周辺にも古くからの人々の生活の跡が残されている。とくに天野川をせきとめて築かれた狭山池はわが国最古の灌漑用溜池といわれ今日では大阪府の史跡名勝に指定されている。狭山池においては現在大阪府によってダム化工事がおこなわれているが、これにともなって狭山池調査事務所が継続的に文化財調査を実施している。狭山神社遺跡、池尻城跡、狭山神社遺跡、狭山藩陣屋跡などの中世から近世にかけての諸遺跡もこの天野川が形成した段丘上に分布している。特に池尻城跡においては昭和60年に大規模な発掘調査が実施されその全貌が明らかになってきている。また近年その発見された池尻遺跡は狭山池北方の谷底に立地する遺跡であるがこの遺跡からは古墳時代の水田や中世の屋敷地などが検出されている。現在個人住宅を中心とする開発が盛んにすすめられているのもこの狭山池を中心とする地域であり、特にここ数年は池尻城跡と狭山藩陣屋跡の調査件数が多くなっている。本報告書に記載した調査成果も両遺跡を中心としたものである。



第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布（豊田兼典氏原図作成）



狭山藩陣屋跡

0 200m



池尻城跡

0 200m

第2図 狹山藩陣屋跡・池尻城跡調査区位置図

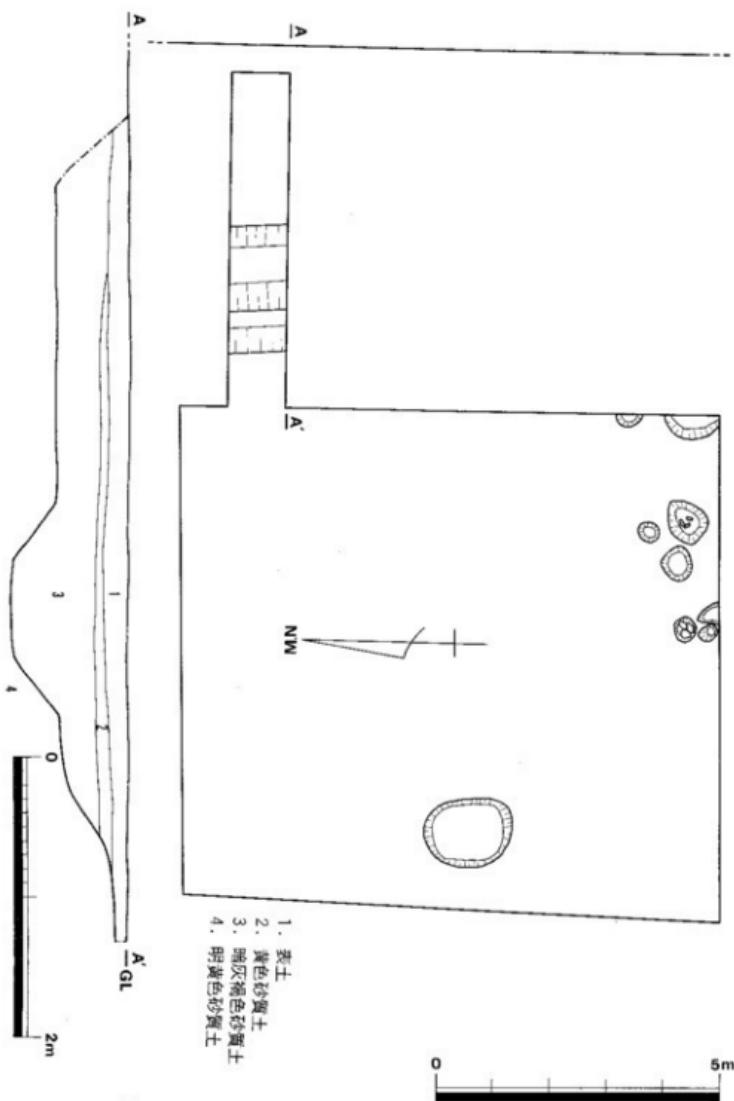
## 2. 狹山藩陣屋跡

狹山藩陣屋跡は大阪狭山市のシンボルである狹山池の北東に位置している。秀吉によつて小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまで一貫して陣屋が営まれた。畿内には幕府の政策もあって小規模な領主が多く、これらの小大名は盛衰が著しかったため、その本拠であった陣屋でも長期間永続されたものは少ない。その意味で狹山藩陣屋跡の発掘のもつ意味は大きい。明治以後陣屋はその景観を大きくかえ、今日ではほぼ全体が住宅地となっているが、近年既存住建て替えや、小規模な再開発のため遺跡内の発掘調査が増大している。これらの調査の結果少しづつではあるが、陣屋の構成が明らかになりつつある。本報告書に掲載した今年度の調査区の位置は第2図のとおりである。

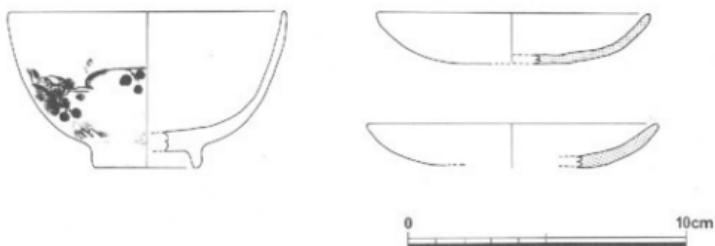
(狹山藩陣屋跡92-1区)

大阪狭山市狹山3丁目2520に所在する。狹山藩陣屋跡は、東除川を境として上屋敷と下屋敷に区画されていたが、本調査区は上屋敷のなかでも御殿（藩主の住居、政庁）西南側に位置した狹山藩藩校である簡修館跡地に相当する。調査は南北9.5m・東西9.0mの本調査区と、その東側の東西6.0m・南北幅1.0mの拡張区を設定して行った。遺構面は明黄色砂質土層の上面に形成された1面のみで、地表下約10~20cmの深さに遺存する。本市教育委員会が行なったこれまでの調査によると、陣屋の上屋敷御殿周辺では上層部遺構面と下層遺構面の2面の遺構面が存在することが確認されているが、今回検出したのはそのうち後者にあたるものと思われる。

本調査区内の中央から北側は、調査前に建っていた住宅の基礎により、遺構が攪乱されており、その検出は不可能であった。よって、本調査区内においては南東隅でピットと土坑、中央西側で土坑を検出したにとどまった。南東側隅のピットは計4つ検出され、その直径は最小のもので30.0cm、最大のもので40.0cmを計測する。その深さはいずれも15.0cm前後である。同地点で検出された土坑は計4つで、その直径は最小のもので65.5cm、最大のもので110.0cmであった。その深さはいずれも20cm前後である。中央西側の土坑は、南北方向の直径155.0cm・東西方向125.0cmを測り、深さは12.0cmであった。拡張区からは、狹山藩陣屋の中央を南北に貫いていた旧道大手筋と簡修館の所在した敷地内とを画する南北方向の溝遺構が検出された。「狹山藩陣屋絵図」（都築家所蔵、以下「絵図」と記す。幕末から明治初頭の状況を示す）を見ると大手筋は、簡修館の前から御殿の前にかけて、他の箇所よりも幅が広くなつており、この付近では、幕末期には現在の道路幅よりも道幅が広いものであったと想定される。拡張区で検出された溝は上端幅で150.0cm・



第3図 狹山藩陣屋跡92-1区遺構平断面図



第4図 狹山藩陣屋跡92-1区、包含層出土遺物実測図

深さ30cmを測る浅い溝であるが、溝の東側は平坦な面が続いて行くのに対して、溝の西側では遺構面に向けて傾斜面が登って行くため、東側の平坦面が道で、西側の傾斜面が敷地内である可能性は強い。なお、この溝は先述の遺構面からの掘りこみである。

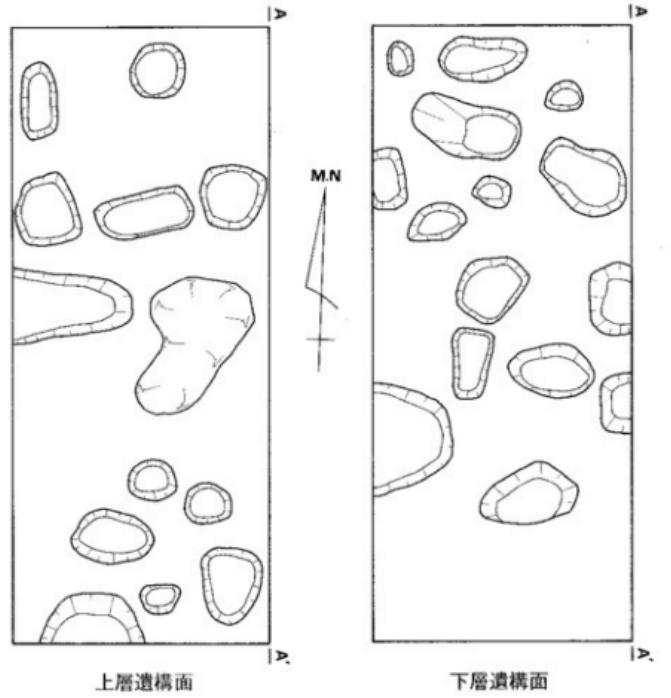
遺物は包含層中より瓦、伊万里焼などが出土しているのみで遺構内からの出土がなかったのは残念である。包含層出土遺物のうち図化しうるものを探査したのが第3図である。1は伊万里焼の染付碗。口径9.9cm、器高5.6cm。外面に草花文を表す。2、3は土師器小皿。2は口径9.7cm、器高1.8cm。3は口径10.4cm、器高1.8cm。ともにまったく施釉せず、胎土は非常にきめ細かい。包含層遺物の様相からこの遺構面は18世紀以前のものである可能性が強い。

#### (狭山陣屋跡92-2区)

大阪狭山市狭山4丁目1164-2に所在する。当調査区は狭山藩陣屋跡の上屋敷の東端やや南よりに位置し、「絵図」では東門北側の箇所に相当し、「元馬場地」と記されている。

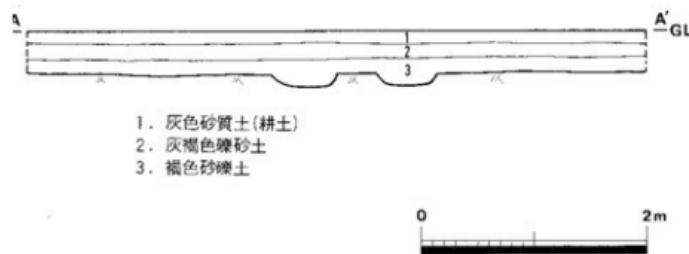
調査は敷地の北半分で行い、南北5.5m、東西2.3mの調査区を設定して掘削した。遺構面と下層遺構面の二面が遺存していた。

上層遺構面は地表下約25cmの深さにあり、遺構は褐色砂礫土を掘りこみ、灰褐色礫砂土を埋め土としている。検出した遺構は、ピットが8箇所と土坑が4箇所である。ピットはその直径が最小のもので25cm、最大のもので70cmを測り、深さはいずれも10cm程度である。土坑は3つが隅円長方形で長径がいずれも70cm以上、深さは10cm~15cmである。



上層遺構面

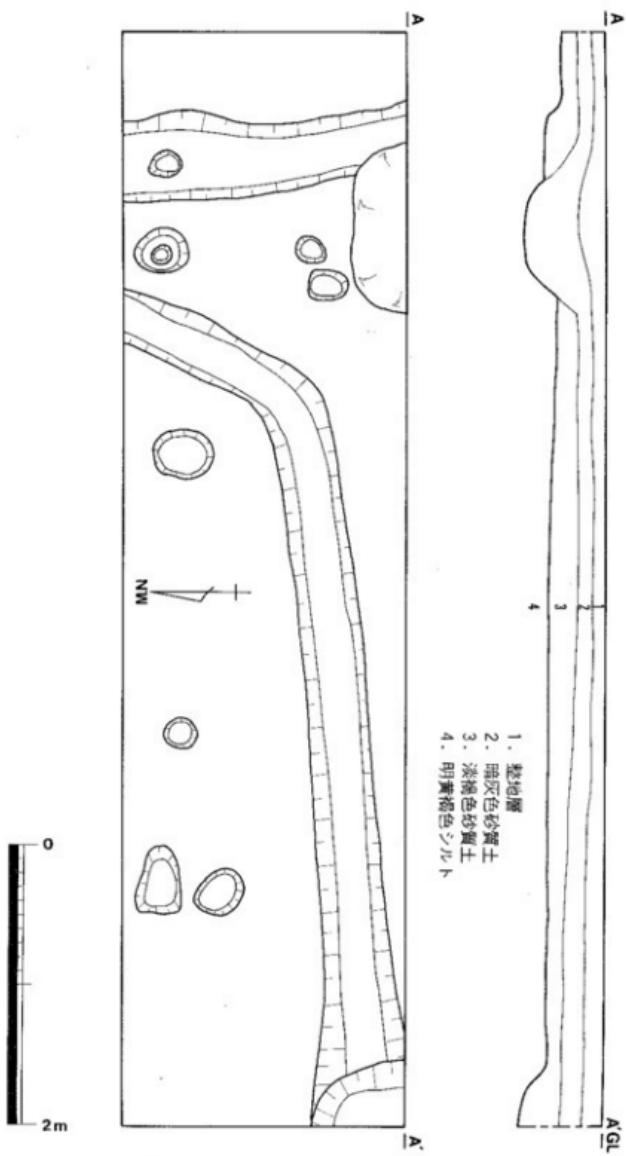
下層遺構面



1. 灰色砂質土(耕土)
2. 灰褐色礫砂土
3. 紅色砂礫土



第5図 狹山藩陣屋跡92-2区遺構平面図



第6図 狹山藩陣屋跡92-3区遺構平断面図

下層遺構面は地表下約38.0cmに遺存し黄褐色砂礫土の地山を掘りこみ、褐色砂礫土を埋め土とする。なお本調査では上層遺構面、下層遺構面ともに遺構面および遺構埋め土が同じ遺跡の他の地域に比べて非常に堅緻であることが特記しうる。

検出された遺構は、ピットが14箇所、土坑が1箇所である。ピットは直径が30cm程度のものと、直径が80cmを越える偏楕円形のものとがみられる。深さは10~25cmである。土坑は南北方向の直径が10.0cmで深さが16.0cmを測る。遺物は伊万里焼の細片が何点か出土しているが図化できるものはなかった。

(狹山藩陣屋跡92-3区)

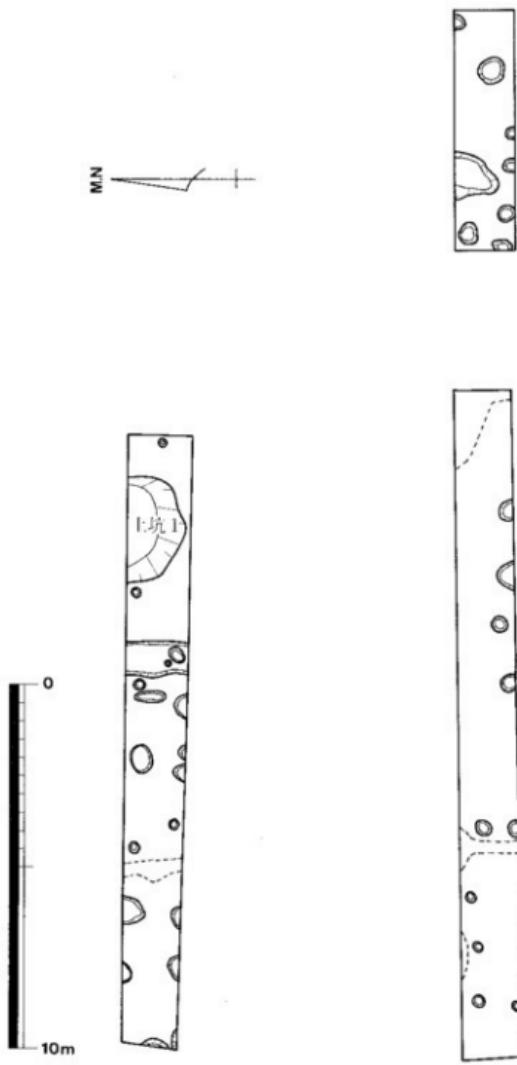
大阪狭山市狹山4丁目2456-2に所在する。当調査区は狹山藩陣屋跡上屋敷の東端近くに位置し、「絵図」に見られる別所家の屋敷地で現在もその子孫に当たる方が居住しておられる。

調査は敷地中央に南北2.0cm・東西7.8cmの調査区を設定して行った。遺構面は厳密に言うと2面存在したが、淡褐色砂質上層を遺構面とする上層遺構面は昭和初期に使用していた建物跡であることが居住者により確認されたので写真撮影を行うにとどめた。調査区東端はその時期には台所であったようで下層遺構面に達している攪乱坑のすぐ北側にはヘツツイの跡も確認できた。調査区中央東2.0mの範囲には平瓦を破碎し立てた状態で敷き詰めた箇所があったが、これは風呂場の床で、居住者の先代が瓦を敷き詰めたということである。狹山藩陣屋跡では近世の遺構面から同様の遺構が出土することがあるがその性格を考えるうえでは参考となろう。

下層遺構面は、地表下30cm~40cmに遺存し明黄褐色シルト層上面を遺構面とする。遺構としては、溝2本と土坑1箇所、ピット8箇所が確認できた。調査区東側の南北方向に伸びる溝は幅約60cm・深さ約15cmで、北よりの底に直径20cm・深さ13cmのピットを有する。もう一本の溝は、その西側で南西・東北方向に伸びたのち、東西方向に伸び、調査区南西端で土坑上端につながる。溝の幅は約55cmで深さは約10cmをはかる。土坑の深さは20.0cmである。他の箇所のピットはその直徑が最小のもので18.0cm、最大のもので50.0cmを測り、深さは8.0cm~12.0cm程度である。この調査区においても頗著な遺物はなかった。

(狹山藩陣屋跡92-4区)

大阪狭山市東池尻3丁目-2536に所在する。当調査区は「絵図」の記載から、藩主が居住した御殿の敷地の北半分に収まるものと考えられる。



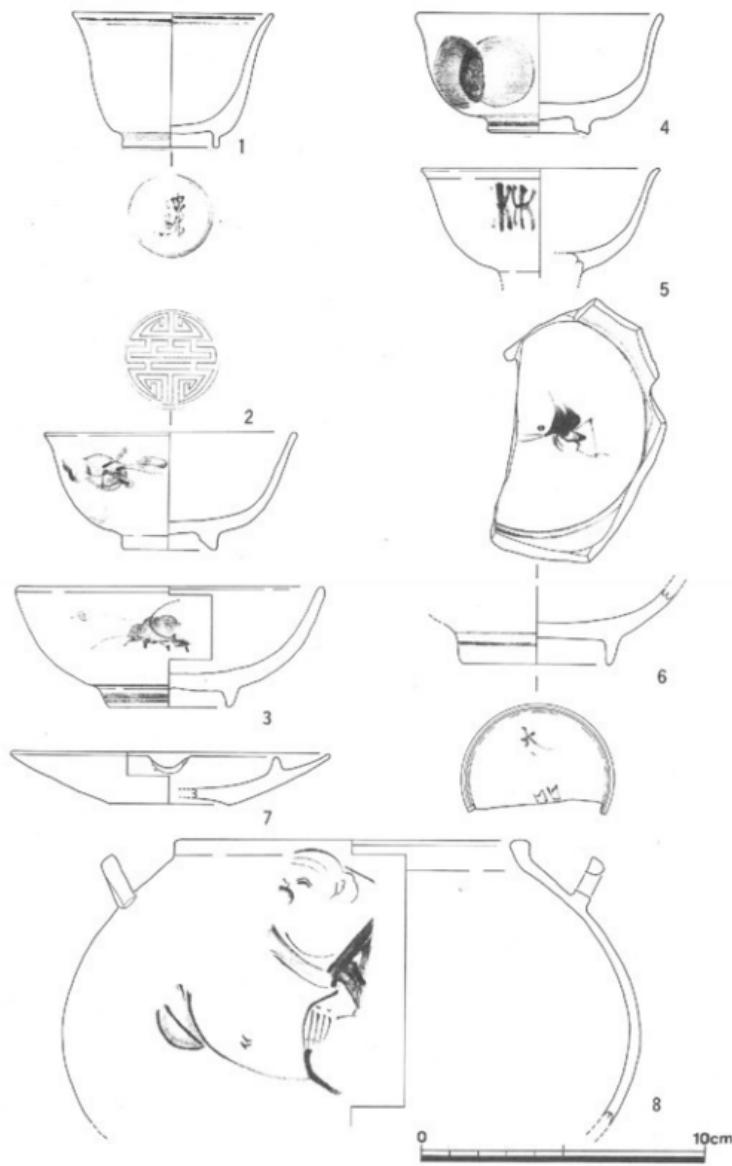
第7図 狹山藩陣屋跡92-4区遺構平面図

調査は調査区を3箇所設定し、北西調査区では東西17m・南北2.0m、南東調査区では東西約6.7m・南北約1.7mの範囲で掘削を行った。当該地の遺構面は、他の発掘の調査の結果、2面ないしは3面が確認されているが、今回の調査では建物の基礎により影響をうける上層遺構面までの掘削にとどめた。上層遺構面は地表下約50cmに存在し、既存建物の解体にともなう整地層および耕土層の直下で検出され、淡黄褐色砂質土層上面を遺構面としている。北西調査区内で検出された遺構は、溝が1、土坑が1、ピットが18である。中央東側で南北に伸びる溝の最大幅は1.0m、深さは8.0cmである。溝の底にはピットが2箇所あり、その直径は14.2cm、48.0cmで、深さは共に12.0cmである。土坑は溝の東側で検出された。その直径は280.0cmで、深さは90.0cmを測る。土坑中からは多くの瓦、陶器、磁器などが出土している。ピットは径の比較的小さいものと大きいものとがあり、小さいほうの直径は25.0cm前後で、大きいほうの直径は70.0cm前後を測る。深さはいずれも10.0cm前後である。調査区南端に掛かるピットの内4箇所が東西方向につらなり、中程でもう一箇所が復元しうるのならば、一辺が8mのたてものとなろうか。

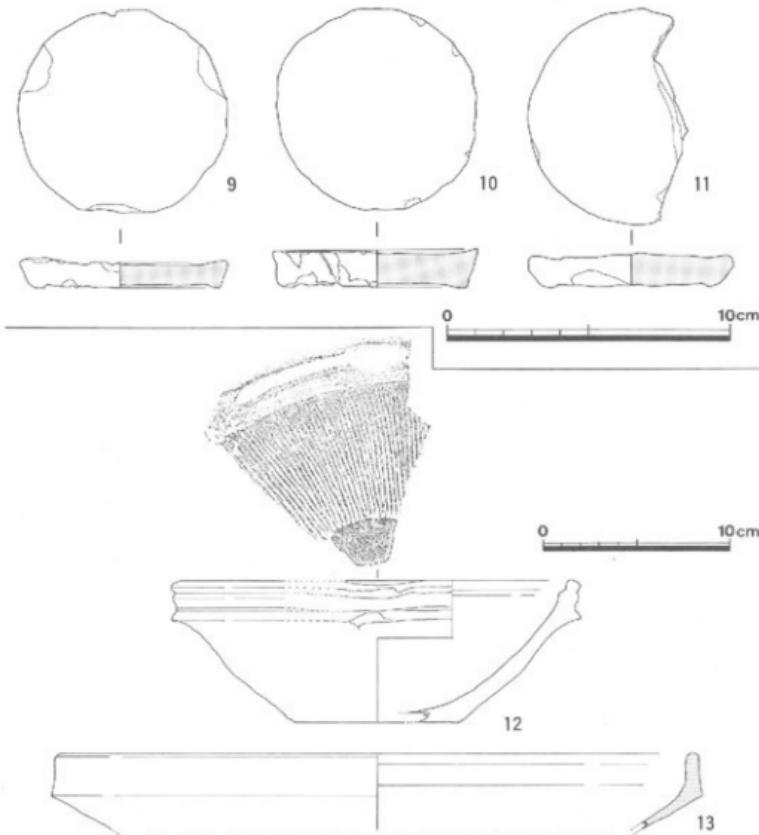
南西調査区で検出されたピットは、計10箇所である。8箇所のピットが比較的小さく40.0cm以下の直径である。深さは12.0cm～15.0cmである。西側の4箇所のピットにやや規則性がみられる。

南東調査区で検出された遺構は土坑が1、ピットが7である。土坑の直径は120.0cm以上を測り、深さは12.0cmである。ピットは大小あり、小さいほうの直径は50.0cm前後で、大きいほうは70.0cm前後である。深さはいずれも13.0cm程度である。調査区南端にかかるピット4箇所が直線的に並んでいる。

本調査区において出土した遺物は第8図、第9図のとおりである。これらの遺物はすべて土坑1より出土したものである。1～6は伊万里焼。1はややこぶりの端反りの染付椀。全体に施釉する。口径7.0cm、器高4.8cm。高台内に「成化年製」の銘が二行四字で記されている。この形の「成化年製」銘は18世紀に多くみられるものである。また口縁部の内外には2本線、高台脇にも3本線が一周する。2も端反りの椀。口径9.0cm、器高4.2cm。見込み部には型押した陽刻文がみられる。文様は「寿」字か。また外面にも文様がみられる。3は口径10.8cm、器高4.3cmというやや平べったい形態の椀である。色調はやや鼠色を帯び、高台端部にはなれ砂が付着する。見込み部分にも重ね焼きの痕跡が残る。全体に施釉し、外面には草花文を施す。4もやや端反りの端反りの染付椀。高台部が欠損しているため器高は不明であるが、口径は8.3cm。外面には文様を施す。6は皿、底部のみが残存しているため器高、口径などは不明であるが、相当大型の皿と思われる。高台は0.9cmと高く、高台内には「大明」と銘を入れる。見込みの文様は蚊か。7は仕切りのついた灯明皿。内面には灰釉を施し、外面は無釉。仕切りには半月形の切り込みが一箇所ある。信楽製かと思われる。口径11.2cm、器高1.9cm。8は土瓶。外面には鉄絵で布袋像を描き灰釉をかける。内面は無釉で注ぎ口は残存しない。口径11.9cm。9～11は塩焼壺の



第8図 狹山藩陣屋跡92-4区出土遺物実測図（1）



第9図 狹山藩陣屋跡92-4区出土遺物実測図(2)

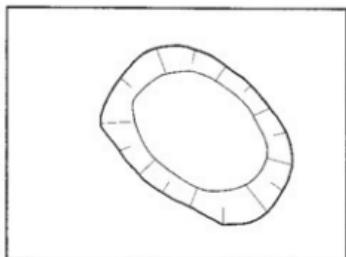
蓋。9は直径7.4cm、厚さ1.0cm。10は直径7.1cm、厚さ1.3cm。11は直径7.8cm、厚さ1.2cm。ともに上面のほうが下面より少し大きい。江戸遺跡などで出土している同種の蓋には産地をしめす刻印がみられることが多いが、これらには表裏とも刻印がみられない。12は堺産と思われるすり鉢。口径21.6cm、器高7.8cm。13はうらく。口径34.0cm。口縁部のみ残存するため器高は不明である。遺物の全体的な様相は18世紀の特色をしめしているが、時期的に若干それより下るものもあり今後検討を要する。

92-4 区は先述したように御殿の一部と思われ、遺構、遺物ともに今後十分に検討する必要がある。予定される建物が小規模なものであるため、面積、掘削深度ともに遺構の性格を知るには十分ではなかったのはいたしかたのないところであるが、幸い本市教育委員会では付近で別の調査を実施しており、それらの調査結果とも総合して御殿の建築規模などを推定していきたい。

(狭山藩陣屋跡92-5区)

大阪狭山市狭山4丁目1148-2に所在する。この場所は「絵図」によれば92-2区同様「元馬場地」のなかにふくまれている。調査区として2.3m×1.9mを設定し人力で掘削したが、50cm程度砂質土による盛り土がなされておりその下が20cmにわたって畑の耕土、さらにその下が黄茶色粘土からなる地山面であった。遺構は土坑一つのみであった。

土坑は東北-南西方向をむく椭円形を呈しており縦120cm、横105cm埋土は畑の耕土であった。遺物はみられなかった。



第10図 狹山藩陣屋跡92-5区 平断面図

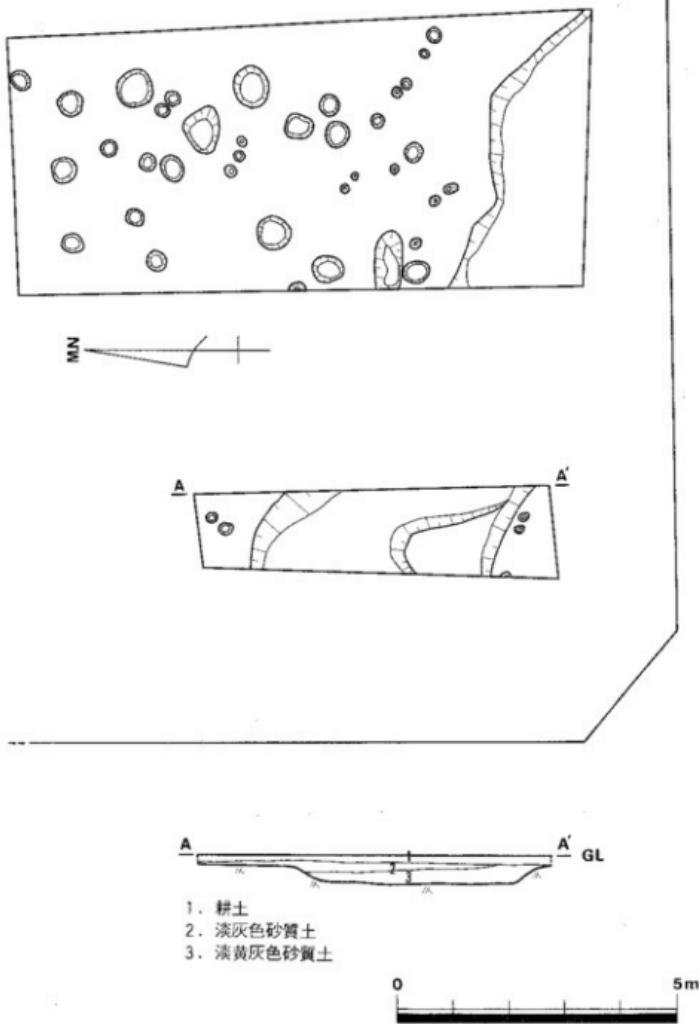
### 3. 池尻城跡

池尻城跡は先に述べた狭山藩陣屋跡と谷をへだてて東西にむかいあう位置、狭山池の北西部に所在する。この地に城跡が存在することはその規格性に富む地形などから早くより指摘されていたが、昭和60年に大阪府教育委員会が行なった大規模な発掘調査により本遺跡の重要性が認識されるようになった。ただ池尻城跡も現在ではほぼ宅地でうめ尽くされてしまい、最近ではこれら既存住宅の建て替えにともなう発掘が中心となってきた。

(池尻城跡92-1)

大阪狭山市池尻中1丁目251-11に所在する。当調査区は1990年に調査を行なった池尻城跡90-3区の北西方向に位置している。

調査は敷地内中央より東半部分で、南北約10m・東西約4.5mの東調査区を西半分で南北約6m、東西約1.5mの西調査区を設定し、掘削を行なった。遺構面は1面のみで、地



第11図 池尻城跡 92-1区平断面図

表下約20cmでそれに達する。検出した遺構は北西・南東方向に伸びる比較的幅の広い溝と溝北側のピット群である。

溝は、西調査区内での幅約4m、東西調査区内での長さ11.7mの規模を有しその深さは約30cmと浅く、底は平坦である。西調査区の南側落ち込みは二段で平坦面を有している。また西調査区を南側落ち込み上端には、それに沿って直径15cmピットが三箇所ある。それと対応するかのように、東調査区の北側落ち込み外側にも直径15cm以下のピットが11箇所検出された。これも溝に沿って2条が直線的に並ぶ。ピットの直径はいずれも10cm以下である。溝の両側に、溝に沿った柵か杭が存在した可能性もある。

その他のピットは直径20cm前後の比較的小さいものと、直径70cm前後の比較的大きめのものとがあり、その合係数は25箇所である。深さは10cm～20cmである。この調査区からは遺物が出土しておらず遺構の時期性格などを特定することはできない。ただ溝やそれにそったピットの存在は南北朝時代の城館池尻城との関連をしめすものである可能性がある。

#### 4. まとめ

今年度も小さな調査区の調査が多く、成果も断片的なものとなった。しかしながら周辺でこれまで行なった発掘調査の成果とつなぎあわせることによって遺跡の全体像にせまりうる可能性がある。ことに近年発掘件数の多い狭山藩陣屋跡においては絵図などとも比較して遺構の性格の特定につとめる必要を感じている。今年度の調査のうち、特筆すべきものとしては狭山藩陣屋跡上屋敷において御殿の一部と思われる地点を発掘したことがあげられる。また池尻城跡においても広い溝を検出しており池尻城の範囲を考えるひとつの手がかりがえられた。これらの成果はいずれもささやかなものであるがそれを積み重ねることによってあらたな狭山の歴史像を築くべく、今後も努力していきたい。

# 図版

図版1 狹山藩陣屋跡92-1区



a. 遺構



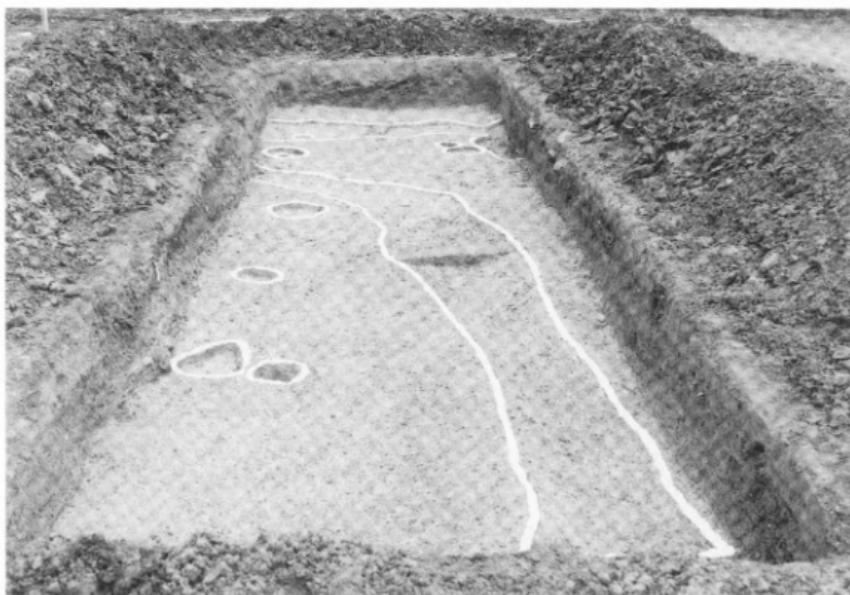
b. 遺物



a. 上層遺構



b. 下層遺構



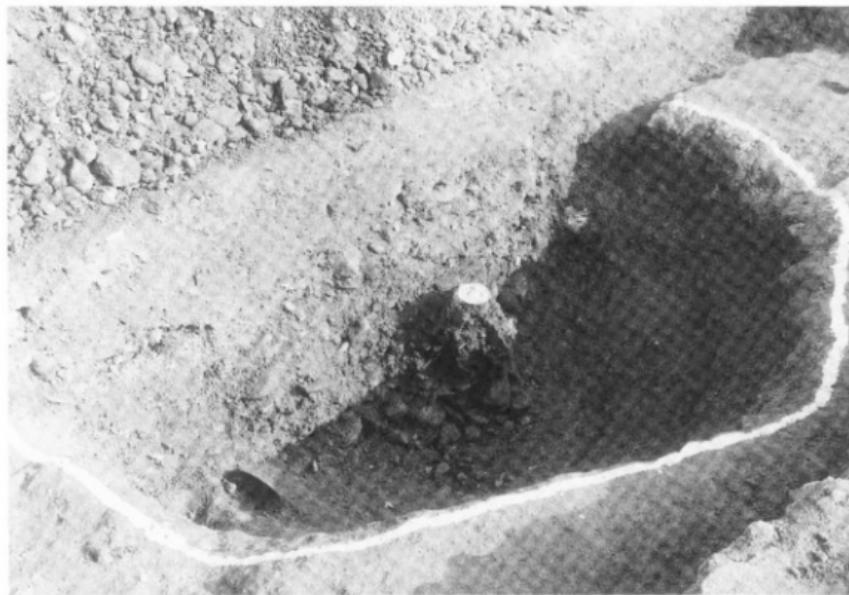
a. 92-3 区 遺構



b. 92-4 区 遺構



a. 遺構



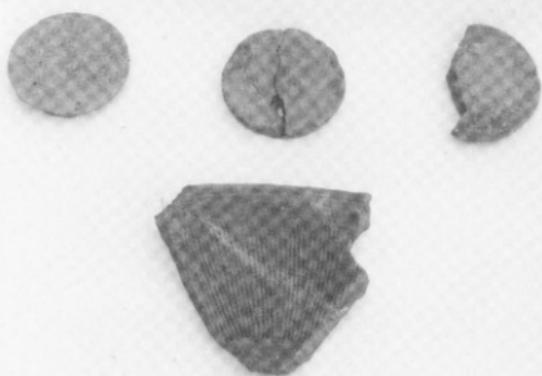
b. 土坑



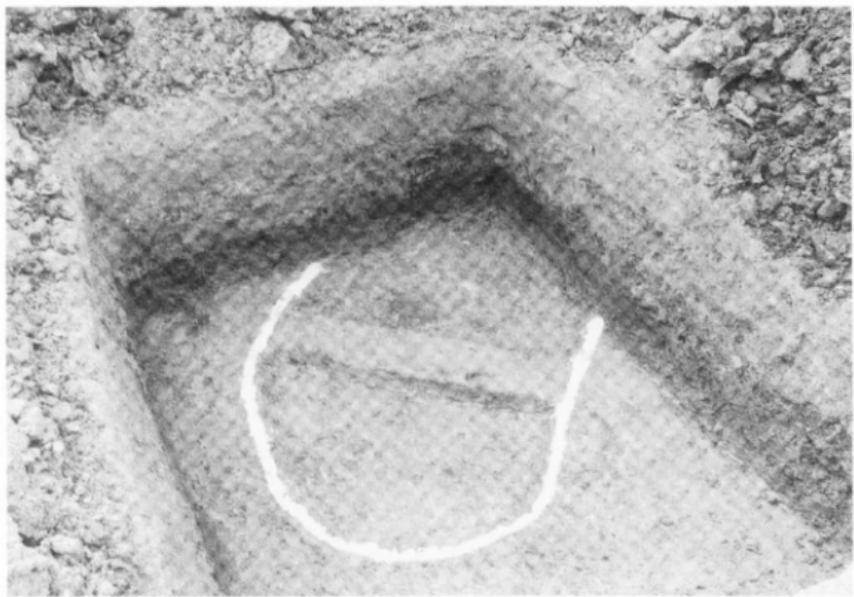
a. 遺物 1



b. 遺物 2



a. 92-4 区 遺物 3



b. 92-5 区 遺構



a. 道構



b. 溝

大阪狭山市文化財報告書9

大阪狭山市内遺跡群  
発掘調査概要報告書3

発行日 平成5年3月31日  
発行 大阪狭山市教育委員会  
印刷 橋本印刷株式会社

